

草原がつなぐ人・自然・文化

全国草原再生ネットワーク

ニュースレター vol.44 (Oct. 2020)



刈り取った茅を運ぶ中学生たち（広島県北広島町／白川勝信氏撮影）

草原植物データベース整備への協力について

2020年度の事業計画でお知らせしたとおり、本年から新たに、草原植物データベース整備事業に取り組むことになりました。既存文献などを収集して、

全国各地の草原に分布する植物種をデータベース化するものです。本整備の概要について、協力機関である国立環境研究所の西廣氏より紹介して頂きます。

草原データベースの構築と情報収集について

(西廣 淳／国立環境研究所気候変動適応センター
気候変動影響観測・監視研究室長)

国立環境研究所（つくば市）の「気候変動適応センター」は、2018年12月に設置された新しい組織です。気候変動への対策として、温室効果ガスの排出削減により気候変動の進行を遅らせる「緩和策」だけでなく、ある程度の温暖化は進行する前提下、気候の変化に社会・経済、生態系を適応させて影響を軽減しようとする「適応策」も重要であることが指摘されています。気候変動適応センターは、気候変動影響に関する研究を進め、地域での適応策の計画・推進をサポートすることを目的としています。効果的な気候変動適応策を立案するためには、自然や社会が過去から現在にかけてどのように変化しているかモニタリングし、その変化に対する気候の影響を明らかにし、将来の状態を予測することが不可欠です。気候変動適応センターでは、海洋から高山までのさまざまな生態系を対象に、変化の要因解明や将来予測の研究を進めています。

草原は、私たちが特に力を入れて情報収集・研究したいと考えている生態系の一つです。日本の草原の多くは、火入れや刈り取りにより樹林への移行（植生遷移）を押しとどめることで維持されてきました。しかし、植生遷移の速度は温暖化によって速まる可能性があるため、今後気候変動が進行すると、これまで通りの管理では草原の維持が困難になる可能性があります。そのような影響を明らかにし、現代・未来の条件にあった草原管理のあり方が提案できないかと考えています。そのような研究のためには、さまざまな地域や時代の草原の植生についての情報

が不可欠です。

国の機関がマニュアル化された方法で生態系調査をしている河川などと異なり、さまざまな主体が管理・調査している草原の実態を把握することは容易ではありません。研究者や団体により個別に草原調査が行われることはありますが、それらの結果は統合されておらず、横断的な解析は困難です。せっかくの調査結果が誰にも気づかれずに散逸してしまう場合もあり、これは大きな損失です。

そこで私どもは（一社）全国草原再生ネットワークと協力し、日本全国の草原とその植生の情報収集・整理に着手しました。草原植生や管理に関する文献を収集し、草原の位置、規模、管理者・管理の状況、記録された植物種の情報を大きな表（データベース）の形で整理する作業です。このデータベースは気候変動影響の研究に活用することを想定していますが、それだけでなく、日本の草原の特徴を後世に残すという自然史資料としての価値も重視しています。ある程度の形になってきましたら、草原利用・管理への影響や絶滅危惧種の盗掘防止などに十分配慮したうえで、オープンデータ化していく方針です。

データベースの元となるのは草原で行われた植生調査の結果です。何らかの目的で草原の植生調査をし、その結果が報告書や論文として出版されましたら、ぜひ私か全国草原再生ネットワークに情報をお寄せください。過去に出版された文献のご紹介も歓迎です。ご協力をよろしく願います。

○文献収集への協力をお願い

草原植物データベース作成のため、ネットワーク事務局では、文献を収集しています。全国の草原を対象に、植物相リスト、植生調査データなど、植物名が掲載された文献をお持ちの方は、事務局までお知らせ下さい（yositaka@biscuit.ocn.ne.jp）。連絡先は最終ページ末にもあります。

全国草原リレー（第22回）

ネットワークの会員を中心に、持ち回りで各地の草原を紹介するのが「草原リレー」です。第22回

は、理事である白川氏に、広島県北広島町における茅活用の取り組みについて紹介して頂きます。

中学生がススキ草原を守る「芸北茅プロジェクト」

（白川勝信：広島県在住／ネットワーク理事）

広島県北広島町芸北では、2016年に「芸北茅プロジェクト（以下「茅プロ」）」が始まりました。茅プロでは、ススキ草原で刈り取られたススキの茅束を出荷してもらう「茅金市場」を1年に1日だけ開場します。市場で買い上げた茅束は、県内で行われる茅葺き屋根の修復に出荷されていきます。また、茅を買い上げる際に地域通貨を使うことで、地域の商店で消費してもらう仕組みを組み込んでいます。茅プロジェクトの目的は、ススキ草原の生態系保全、茅葺き建築などの文化財保護、地域経済の活性化など複数ありますが、最も大事にされているのが教育です。

茅プロは、芸北中学校を中心に、保護者、地元NPO団体の西中国山地自然史研究会、教育委員会、そして高原の自然館から組織される実行委員会によって運営されています。芸北中学校の2年生は、学校独自のカリキュラムとして茅の価値や、茅を流通させる茅プロしくみについて、2学期から学び始めます。茅刈り、広報、受入などの斑に分かれて、「どのようにすれば茅をたくさん集められるか」について、先輩や先生に聞いたり、自分たちで考えて、その年の茅プロの進め方について作戦を立てます。

2学期から温めてきた作戦が実行に移されるのは、10月からです。茅葺士の沖元太一さんを講師に招き、地元のスキー場をフィールドに、ススキを刈って茅束にする手順を習います。今年は、よりたくさんの茅を集めるために、生徒が校長先生と交渉して、自分たちで茅を刈る回数を1回分増やして3回実施するそうです。また、授業を「茅刈りの講習会」と位置付けて、地元の人達にも参加していただくように呼びかけるチラシも作られていました。

茅プロの実践は、12月に開かれる「茅

金市場」です。市場では、地域の人が持ち込む茅束が規格に沿っているか確認し、持ち込まれた茅束の数に応じて地域通貨を支払います。トラックからの荷下ろし、検品、倉庫への収蔵、そして地域通貨の発行まで、全てを生徒が手分けして行います。2019年には、792束を受け入れ、20万円分以上の地域通貨を発行しました。受け入れた茅は、町内の民家の屋根に使われた他、県内にある国指定の文化財を修復するために出荷される予定になっています。

このように、年毎に成果も上がってきた茅プロですが、回数を重ねたからこそ見えてきた課題もあります。そのうち3つを紹介します。



課題1：受け入れる茅の品質

茅金市場は、一年に一度しか開かれませんが、受け入れを担当する中学生は、毎年メンバーが替わり、授業を担当する先生も入れ替わります。そのため、出荷してくれる地域の人と市場との関係が深まる事が無く、出荷される茅の品質についてお願いする機会がありません。生徒が自分たち自身で刈り取る茅の質も、上げていく必要があります。



課題2：茅の保管場所

2019年に受け入れた茅束の数は過去最高となり、茅を保管する体育館がいっぱいになりました。これまでは「できるだけたくさんの茅を出荷してもらおう」ということを目標にしていたのですが、5年目を迎えて、新たに保管場所を確保しなければならなくなりました。今のところ、移転前の中学校施設が候補に上がっています。

課題3：出荷先の確保

茅の供給が増えた分、需要を増やす必要が出てきました。理想的な運用は、次の茅金市場が開かれるまでの1年間で茅を販売して在庫を無くし、新たに受け入れる、というサイクルです。出荷先がなければ在庫が無くならず、翌年の茅を買い入れるための資金も得られません。芸北近隣の人たちに茅プロを知ってもらい、茅プロで出荷される茅を頼りにしてもらうようになることが理想です。

これから

課題はありますが、学校やPTAが熱心に取り組んでおり、事業として続けることの不安はありません。何より、2番目と3番目の課題は「出荷される茅が増えた」という喜ばしい状況に起因します。これからも色々なことが起きるでしょうが、生徒たちの主体性を育てることを第一に、解決すべき課題は大人たちが知恵や力を合わせて、地域の恒例行事にしていきたいと思えます。



草原をめぐる動き (2020年10月～2021年1月)

- 10/3 自然観察交流会⑦ (場所: 山梨県山梨市牧丘町 乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 10/3-4 茨城筑波山麓茅刈り茅葺きワークショップ: 茅葺き体験研修 (場所: 茨城県石岡市 常陸風土記の丘、連絡先: 日本茅葺き文化協会)
- 10/10-1/7 特別企画展「ひょうごの草原～人が育んだ草原と生き物の歴史～」(場所: 兵庫県三田市 兵庫県立人と自然の博物館、連絡先: 兵庫県立人と自然の博物館)
- 10/31-11/1 上ノ原の茅刈り (場所: 群馬県みなかみ町、連絡先: 森林塾青水)
- 11/7 自然観察交流会⑧ (場所: 山梨県山梨市牧丘町 乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 11/7 草刈りボランティア準備 (場所: 山梨県山梨市 牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 11/15 八幡高原の野鳥観察会 (場所: 広島県山県郡 北広島町千町原、連絡先: 西中国山地自然史研究会)
- 11/21-22 上ノ原の茅出し・山之口終い (場所: 群馬県みなかみ町、連絡先: 森林塾青水)
- 11/23 草刈りボランティア (場所: 山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 11/23 千町原の茅刈り (場所: 広島県山県郡北広島町千町原、連絡先: 西中国山地自然史研究会)
- 12/5 自然観察交流会⑨ (場所: 山梨県山梨市牧丘町 乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 12/12 茨城筑波山麓茅刈り茅葺きワークショップ: 茅刈り体験研修 (場所: 茨城県つくば市 高エネルギー加速器研究機構茅場、連絡先: 日本茅葺き文化協会)
- 1/9 自然観察交流会⑩ (場所: 山梨県山梨市牧丘町 乙女高原、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 1/31 第20回乙女高原フォーラム (場所: 山梨県山梨市 夢わーく山梨、連絡先: 乙女高原ファンクラブ)
- 1/31 野焼き支援ボランティア 2019年度初心者研修会第1回 (場所: 熊本県阿蘇市小里 阿蘇草原保全活動センター、連絡先: 阿蘇グリーンストック) (2/6、2/13にも開催)

※予定が変更になる場合があります。上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

書籍紹介 人と生態系のダイナミクス ①農地・草地の歴史と未来 (ネットワーク事務局)

「人と生態系のダイナミクス」シリーズは、長年にわたる人との関わり合いの中で形成されてきた5つの生態系を取り上げるものです。主な内容は、各生態系の成り立ちと変遷、現状の課題、解決のための取り組み、の構成となっています。取り上げられる生態系は、農地と草地、森林、河川・湖沼・沿岸、都市です。

農地・草地の歴史と未来では、まず、日本の自然の成り立ちと変遷が取り上げてあり、その中で農耕の歴史、農業社会の発展などが紹介されています。続いて、農地・草地生態系の特徴について、最後に農地や草地の保全に向けた取り組みが書かれています。古来より深い結びつきのある農地と草地についてまとめられた興味深い一冊です。



催し物紹介 兵庫県立人と自然の博物館特別企画展「ひょうごの草原 ～人が育んだ草原と生き物の歴史～」 (ネットワーク事務局)

兵庫県立人と自然の博物館(兵庫県三田市)では、特別企画展「ひょうごの草原～人が育んだ草原と生き物の歴史～」が、10月10日から2021年1月7

日まで開催されます。以下は、同館HPに掲載された情報を抜粋して紹介しています。

○主旨

温暖湿潤な日本(兵庫県)では、草原は人の手による火入れや草刈りなどの管理によって維持されてきました。現在の兵庫県では、広大な草原はごく一部でしか見られず、あまり身近に感じられないかもしれません。しかし、ほんの数十年前まで、草原はとても身近な存在でした。縄文時代から20世紀前半までの長い間、人と草原は共生をしてきました。しかし、高度経済成長期の生活様式の変化によって、草原が利用されなくなり、そこにすむ生き物は危機的な状況に追い込まれてきました。今回の展示特別企画では、兵庫県の草原を取り上げ、草原とそこにすむ生き物の隆盛と衰退の歴史、また草原の保全について紹介します。

○展示の見所

兵庫県内で繁殖が確認されたイヌワシをはじめ、草原に生息する生き物の標本を100点以上展示します。草原とそこにすむ生き物の歴史についての最新の研究成果も必見です。

そのほか、関連イベントなども多数、催されますので、詳細は同館ホームページをご覧ください。



全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol. 44 2020年10月号

一般社団法人全国草原再生ネットワーク事務局
〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 378-14
大田市ゲストハウス雪見院内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-86-8899

【編集後記】当ネットワークが社団法人化をして、はじめての新規事業となる「草原植物データベース整備事業」が動き出します。全国各地には、地域でしか入手できない文献があるかと思えます。データベースの充実と、今後の草原保全に有益な資料になるよう、会員のみなさまにもご協力をお願いいたします。